

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

カンポン：都市における民族別居住の歴史

西尾寛治 (防衛大学校教授)



インドネシア・リアウ州ピンタン島のタンジュン・ピナンにあるカンボン・ブギス (ブギス人のカンボン) =筆者撮影

マレーシア滞在経験者にとって、おそらく“カンボン”というマレー語は、何度か聞いたことがあるだろう。マレーシアでは一般に「村落」を意味する語であり、カンボンを冠した地名は無数にある。また、この語はマレー人の会話にもしばしば登場する。もっとも、その場合は「故郷」を意味することが多い。“カンボンニャ・ディマナ?”(カンボンはどこですか)といえ、出身地を尋ねているわけである。

だが、前近代期のカンボンの用例は、今日とはかなり異なっていた。マレー語辞書を参照してみると、カンボンには「都市の中のある特定の集団が居住する区域」という意味もある。前近代のマレー語文献には、この意味でのカンボンの用例が多い。たとえば、カンボン・ブンダハラとは、マレー系王国の王都に形成されたブンダハラ(宰相職)主従の居住区域を意味した。また、カンボンには特定の外国人で構成されるものも存在した。

ここで歴史をさかのぼってみよう。アジアの海上交通が活発化し、中国南部から西アジアに至る地域が交易網で結ばれたのは7、8世紀ごろである。マラッカ海峡というアジアの海の要衝を抱える東南アジアは、必然的にこの海上交易に組み込まれ、河口に形成された港市と王都がほぼ同一地点を占めるような国家が成立した。前近代の東南アジアに発展したこの種の国家を“港市国家”という。8世紀以降、アジア各地の商人が頻繁に来航した東南アジアの港市は、多様な民族の居住する場となった。

さて、外来商人は東南アジアの港市にどのように居

住していたのか。当時の文献や地図を参照してみると、彼らは民族または出身地域ごとに特定の区画を割り当てられて居住していたことがわかる。これは、インドネシアやタイの港市も同様である。このような外国人の居住区も、マレー語でカンボンといった。すなわち、カンボン・アラブ、カンボン・クリン、カンボン・チナとは、それぞれアラブ人居住区、インド人居住区、中国人居住区を意味したのである。

港市の業務を統括するシャーバンドル(港務長官)には、有力な外来商人が任命された。外国人居住区の管理やその外国人居住民と王宮との仲介役を果たしたのも、このシャーバンドルであった。シャーバンドルは通常2名程任命された。だが、「84の言語が聞かれた」ほど多様な外国人でにぎわったムラカ王国の港市ムラカには、出身地域別に4名のシャーバンドルが任命されていたという。

以上のように、港市には前近代より多民族社会が成立していた。したがって、外国人居住区(カンボン)の設定やその管理者としてのシャーバンドルの任命は、外国人同士または外国人と在地民とのトラブルを回避するため、必要な措置であったであろう。ここで注目したいのは、都市における民族別居住区の形成が、前近代の在地社会にさかのぼる点である。マレーシアやシンガポールの都市における民族別居住については、従来イギリスの植民地政策が原因としてしばしば指摘されてきた。だが、そうした居住形態が前近代の在地社会にも認められる点に留意すると、その学説は再検討の余地があるように思われる。「民族別の居住形態は在地社会に起源する伝統であり、イギリスはそれを踏襲したにすぎない」という可能性も否定できないからである。前近代期のカンボンの用例は、マレーシアが民族を単位とした共存方法を近代以降も維持している国家であることを示唆している。

<筆者紹介>

1958年、鳥取県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了。文学博士。マレーシア・サバ大学講師などを経て、現在、防衛大学校人文社会科学群人間文化学科教授。専門はマレーシア・インドネシア近世史。「マレー政治文化」「マレー系港市国家」「マレー人概念と民族間の共存」など、マレー世界の歴史的展開を研究している。